

使徒言行録研究1

使徒1：1-5

これから学ぶ「使徒言行録」は、キリスト教会がどのようにして誕生し、どのように広がって行ったのかが、何人かの使徒たち、伝道者たちの働きを描くことによって語っていく。

主イエス・キリストによる救いにあずかり、主イエスに結び合わされて生きる者とされた人々が、教会という群れへと結集され、そしてそこから押し出されてみ言葉を宣べ伝えていく。その働きによって主イエスの福音が広まり、多くの人々が主イエスを信じて共に歩むようになり、至るところで信じる者の群れである教会が生まれ、育っていった、そういう初代の教会の伝道の息吹を、活力を、使徒言行録の学びを通して体験したい。使徒言行録を読むことは、使徒たちと共に伝道の旅に出ることである。今日から、そういう新しい旅に出たい。旅路の先に何が待っているのか、どんな素晴らしい体験が、喜ばしい出会いが与えられるのか、とても楽しみである。

使徒言行録の著作年代は、紀元80年代から90年代と言われている。著者は、ルカによる福音書と同一人物であるルカとされている。おそらくユダヤ人ではない異邦人キリスト者。

1-2節。「テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」

使徒言行録の序文であるここで、ルカは先の第一巻をどういうものとして自分で理解しているかということが、短い言葉によって紹介している。

「イエスが行い、また教え始めた」「すべてのことについて」。このように、ルカは、主イエスの「行い」と「教え」との二つの面から書いた、と言っている。

「イエスの行い」。どの福音書も主イエスの行いを記しているが、ルカによる福音書の非常に大きな特色は、たとえば、主イエスがガリラヤの湖の上を歩いて来られたというような奇跡、あるいは主イエスが呪ったいちじくが翌朝にはもう見事に枯れてしまっていたというふうな自然界を巻き込むような奇跡、こうしたものをルカは書かない。

むしろ、ルカが好んで書いたのは、弱い人を救う、弱者を救済するそういう奇跡である。ナインの村の一人息子を失ったやもめを憐れんで、死んだ一人息子を生き返らせる。あるいは十八年も悪霊に取りつかれていた女を安息日であっても癒す。あるいは、サマリア人を含む十人の重い皮膚病の患者を清める。このように、ルカの記す主イエスの行いというのは、弱った人、苦しむ人を助けるという行いが主体となっている。

それと、どの福音書にも共通しているが、私たちのために御自身を与えるという究極

の行いもある。「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これはあなたがたのために与えられるわたしの体である。』…『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。』」

「教え」。教えについて言うと、一般には、ルカによる福音書は、たとえば、お祈りについてとか、特に財産、富の管理についていろんな信仰上の指針を与える福音書である、と言われることが多い。

しかしこれらの教えよりも、神様をどういう方として理解するか、それと人間とはどのようなものであるか、このことをむしろ根本から教えようとしていると思われる。

1. 神観、神とはどういう方か。これについてルカは、特に罪人に対する愛と憐れみに満ちたお方が神様なのだ、ということを教えようとしていると思われる。ルカだけが伝える主イエスの御言葉のいくつかの中に、12章32節「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と教える。15章7節「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びがある」。こういう御言葉を通して、罪人に対する愛と憐れみに満ちた父なる神と言う方を、ルカが伝える主イエスは教えておられる。
2. 人間について。
 - ①とりわけ差別がない、差別をしないという点が非常に際立っている。町中で罪の女と言われていた女の口づけを許す。徴税人の頭と言われていたザアカイを、「この人もアブラハムの子なのだから」と言ってその家に泊まる。譬話の中でも、“善いサマリア人の譬え話”をお語りになり、“ファリサイ派の人と徴税人のたとえ”の中では徴税人の方を良しとする。
 - ②人間と言うものはどんなに生き損なっただけか、失敗した人生を送っても、最後の最後はとにかく悔い改めるならば父なる神は喜んでくださる、そういう慰めを与えてくれる。十字架上の犯罪人の一人とイエス様との対話、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」。有名な、“放蕩息子のたとえ話”でも「いなくなっていたのに見つかったからだ」と言って、とにかく帰って来る者を迎え入れる父。こういうものを非常に印象深く教えてくださっている。

以上が、ルカ自身が振り返る第一巻の『ルカによる福音書』である。それに対し、これからルカは何を書こうとするのだろうか。それについては1,2節の後半のところ「イエスが行い、また教え始めてから」と語ったのち続けて、「お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までの」と書いている。

口語訳でも新共同訳でも「始めから」「上げられる日まで」というふうに「から」と「まで」と括弧でくくるように訳しているが、そうではない。「イエスが行い、また教えはじめられたすべてのことについて」「天に一原文には『天』という言葉はない—上

げられる日まで」で第一巻を区切った。でも、この「始め」たことが続いて行くのを第二巻で書こう、こういう計画である。

「指図を与え」と訳されているのは、ルカによる福音書では「命じた」と訳されている言葉である(4:10、使徒言行録 13:47 など)。

そういう命令を与える時に「聖霊を通して命じた」と大変珍しい言い回しがある。

「イエスが行い、また教え始めたすべてのこと」を、昇天のところまでで第一巻としたということは、第二巻は、主イエスの始められたことが続いていく内容だということになる。目に見える形では使徒たちの言行になるが、その使徒たちを通して、実は主イエスが行い続け、また教え続けられる物語を書くのだ、そういう自覚である。だから、使徒言行録をずっと読んでいくと、なるほど、非常に頻繁に「主」は語りかけ、あるいは幻に現れ、あるいは心を開き、あるいは導き出しというふうに、ほとんどすべてのことは「主」の御業、あるいは「主」の御言葉で成り立っていく、そういう記録である。(マルコ 16 章 20 節、結び二、マタイ 28 章 20 節参照)。

3 節. 「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」

ここでの「苦難」とは、次の「生きている」という言葉と対比されているので、「苦難を受けた」とは、「死んだ、殺された、死の苦しみを味わった」という意味であり、既に、ルカによる福音書 24 章 26 節、あるいは 46 節で「苦しみを受けて、栄光に入る」とか、「苦しみを受け、三日目に……復活する」と書いたその「苦しみを受ける」、つまり、「死の苦しみを味わう」という使い方と同じ使い方である。

「証拠」と訳されている言葉は、新約聖書ではここしか出て来ない言葉で、“確信させるに足りる、決定的な証拠”を表すのに使われる専門用語である。漠然とした「証拠」というのではなく、論理的にもうどうしてもこれは信じざるを得ないと思わせる決定的な「証拠」、これを「数多く」主イエスは示された。「示す」と訳されている言葉は、もともとは「傍らに置く」とか「そばに立つ、そばに出す」という意味で、場合によっては、「証拠を提出する、証拠を挙げる」、そこから「証明する」という意味で使われる。

「四十日にわたって」というのは、新約聖書の中でここだけに記されている期間である。ルカは、福音書の 24 章において、復活のキリストはいつもエルサレムとその近辺だけ顕現されたように見える書き方をしている。一方、他の福音書は、“ガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる”と言って、実際にガリラヤで弟子たちは復活の主イエスとお会いしたことを書いている。だが、ルカだけが、実は復活顕現は「四十日」間あったというのだから、それはエルサレムでもガリラヤに行ってもお会いしたでしょうと、そういうガリラヤでの顕現の余地を残している。

「現れる」と訳されている言葉も、新約聖書ではここしか出て来ない言葉で「自分を見られるようにした」という珍しい言い回しである。復活の主イエス・キリストは、この四十日間に、御自分が生きていることを決定的に証明することだけでなく、更に「神の国について話す」という教育も施された、と言われている。「神の国について」と訳されている言葉は、「神の国についてのもろもろの事柄を話された」という言い回し。

4-5 節. 「そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。』」

この先の 10 章 41 節によると、復活の主イエスと一緒に食事をしてきたことが「選ばれた証人」の非常に大事な特権だったのではないかと思われる。

「しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。」

「前にわたしから聞いた」とは、ルカによる福音書 24 章 49 節である。「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

「ヨハネ」とはいわゆる洗礼者ヨハネのことである。主イエスは、ルカによる福音書 3 章 16 節にあるヨハネが言った言葉をもじりながら今弟子たちに教えておられる。

ヨハネが、私の後から来るお方が、聖霊と火によって洗礼を授けるだろうと言った時には、それがいつ頃起こることなのかということまでは分からなかった。それが今、主イエスは「まもなく」起こるのだとはっきり限定される。

「聖霊による洗礼」とは何を指すのか。原文は受身形で「聖霊によってバプテスマされる」という表現。本来「バプテスマする」とか「バプテスマされる」というのは、「水に漬ける」「水に浸す」という意味の言葉。

ここでは決して洗礼式のことを言っているのではなく、あくまでも比喩的な表現として「聖霊に浸けられる」、そう言っておられるのである。この約束は、あくまでも、弟子たちがするであろうこれからの聖霊体験、それを比喩的に「聖霊に漬けられる」「聖霊に浸される」、「聖霊にバプテスマされる」と言える体験だ、と言っているのである。

これは次の 2 章の聖霊降臨日の時だけを語るのではない。使徒言行録を貫く経験である。例えば、8 章、10 章、11 章、19 章などなど。これから「聖霊」が頻繁に出てくる。

1, 2 節では「主が～なさる」という言い方と、3 から 5 節の「聖霊が～なさる」という言い方を合わせると、この第二巻は、使徒たちという人間よりも、主イエスと聖霊が主人公になってずっと事柄を続け進めておられる有様を書いている、と言えるのではないかと思う。